

# 糸満市喜屋武同村貝塚出土の曾畠・轟系

## 土器について

新田重清

### 1.はじめに

喜屋武同村貝塚は昭和30年6月頃、筆者が発見し、多和田真淳氏によって文化財要覧に紹介されている周知の遺跡である。<sup>註1</sup>

昭和50年11月4日、県文化課金武正紀専門員と筆者が、糸満市の埋蔵文化財分布調査のため本遺跡を訪れたところ、約4,000m<sup>2</sup>にわたって跡形もなく破壊されていた。糸満市当局による畑地灌漑用貯水工事のためである。

早速、市当局に警告し、当時、一部残存していた包含層については保存するよう申し入れた。しかし、工事現場請負業者への連絡が徹底しなかったためか、これも除去されてしまった（図版第5—1参照）。

県文化課では51年2月10日、この一連の遺跡破壊について実情を調査し、今後の保存問題を協議するために市当局と話し合いをもった。その結果、市当局は埋蔵文化財包蔵地であることを認識せず工事を着工したことを深謝し、今後かかるようなことがないよう行政面での協議体制をつくり、文化財保存に対処していくことを約束した。更に遺跡破壊については顛末書を作成して報告し、改めて発掘調査届を提出して文化庁長官の指示をうけることを諒解した。引き続き現地調査を行なったが、工事によって削られた北東側の断面から県文化課安里嗣淳専門員によって面繩前庭式土器が採集された（第1図及び図版第5—1参照）。なお、工事作業中にビーチ、ロックからすでに検出されている化石人骨を確認し、その出土層準と地質調査を後日行なうことになった。

翌11日、糸満市の郷土研究家島袋良徳氏、当館の大城逸朗学芸員らと化石人骨出土地点の層準を調査したが、その際に曾畠・轟系土器の口縁部片を検出した。

その後も大城逸朗学芸員による地質調査に筆者も同行したが、折を見て現地を数回も踏査し、工事の進行を注目してきた。

本稿で紹介する資料は、これら一連の現地踏査で検出されたもので、筆者の手元に保管されているものである。

なお、本遺跡で出土した他の資料については、後日、市当局の責任において再調査され、報告されることとおもわれる。

本稿をまとめるにあたり、終始行動を共にした糸満市文化財研究会（会長 島袋良徳氏）の会員諸氏地質学的な所見と石質の同定及び土器のテンパーについて教示いただいた当館の大城逸朗学芸員に感謝申し上げ、県文化課や市当局には、いろいろ配慮をいただいた。ここに記して御礼申し上げます。

### 2.位置および自然環境

本遺跡は糸満市字喜屋武の西海岸側に位置し、付近にある部落共同井戸を中心として約4,000 m<sup>2</sup>にわたっている。

地籍は字喜屋武田代原1251～1265番の15筆にまたがっている。

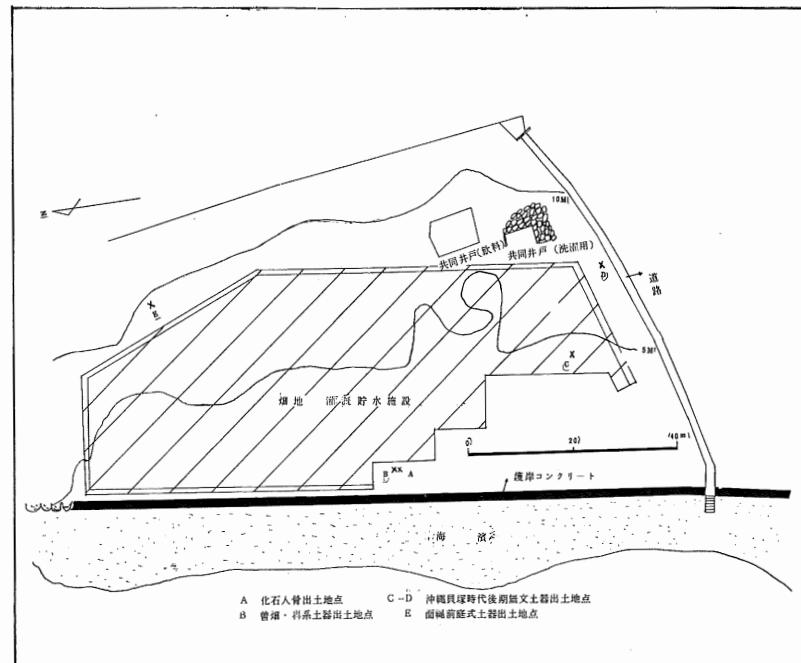
湧水のある共同井戸あたりが海拔7～8 mの地点で、泉を中心に遺跡は南北に展開している。この井戸は数年前までは飲料水として、又は洗濯用水として、区民にとってはかけがえのない生活用水であった。水道が設置されてその必要がなくなり、湧水の流れる一帯に一部水芋が栽培されていたが、周辺はダンチクやギンネムの生い繁る荒廃地になっていた。

遺跡付近には、青灰色のシルト質粘土からなる島尻層群（新第三紀鮮新世）と同層群を不整合におおう琉球石灰岩（新生代第四紀）

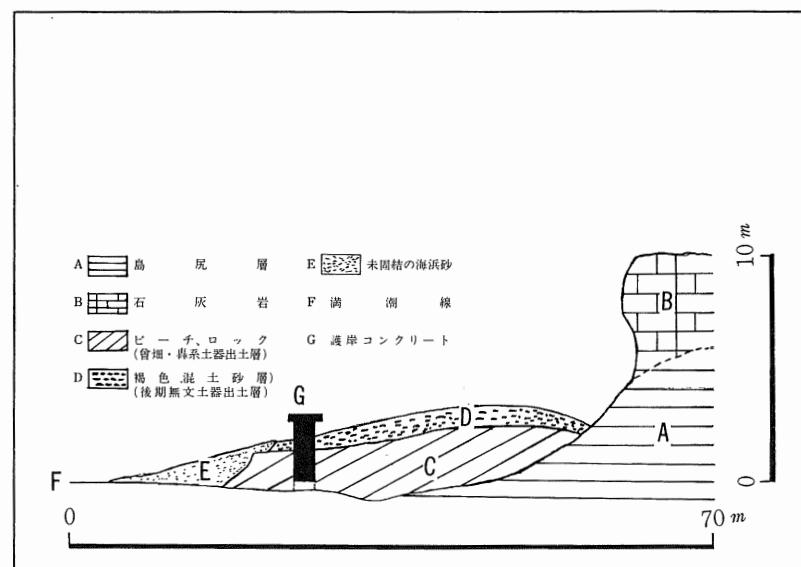
がみられる。遺跡は、

海側から浸食されてできた海蝕台上に位置し、この海蝕台をビーチ・ロック（かつては海蝕台を不整合におおう海浜砂）がおおっている。ビーチ・ロックの厚さは2 m以上に及んでいた。更にこのビーチ・ロックの上を褐色混土砂層が堆積していた。

遺跡の背後には垂直な崖や傾斜面もみられるが、現海水面よりも高い時の海水面時に形成されたともわれるノッチも確認された。



第1図 喜屋武同村貝塚平面図



第2図 喜屋武同村貝塚断面模式図

ところで、現世に入り、海進がもっとも進行した時期は縄文前期頃と考えられており、このビーチ・ロックはその頃の海進によってもたらされた海浜砂と考えられる。

後述する曾畠・轟系土器が、このビーチ・ロックの層から検出されたこととも一致していて興味深い。

一般に縄文海進は今から5000～6000年前頃に氷河期の氷が解けて海面が上昇して起つた現象で、<sup>註2</sup>沖縄でも海面が現在より2～5m上昇したと考えられている。

沖縄で発見された曾畠・轟系出土遺跡は、読谷村渡具知東原遺跡をはじめ、<sup>註3</sup>嘉手納町野国第2遺跡・<sup>註4</sup>恩納村塙屋貝塚・伊是名村具志川島、および本遺跡を含めて5ヵ所で確認されているが、その立地は、海拔2～3m以下の海岸低地か川口に位置している。<sup>註5</sup><sup>註6</sup>

本遺跡では、ビーチ・ロックの頂面が2.5m内外の表面又は層の中に生活層と推定される焼けた砂・木炭・灰などがみられ、この生活層よりもレベルの下った海拔110～60cmの層準からは化石人骨(頭骨)、曾畠・轟系土器、凹石、獸魚骨片、木炭などが検出された(第1図参照)。

更にビーチ・ロックをおおっている褐色砂層又は褐色混土砂層(第2図参照)には、後期無文土器が、包含されていたが(第1図参照)、筆者らが調査する以前に破壊され、土砂とともに遺物は別の所に移動されていた。幸いにも、道を距てた南側の畠地(図版第5-2)には包含層がのこっており、ここから採集された資料が図版第6-5である。

### 3. 遺 物

本遺跡から検出された遺物は、曾畠・轟系土器、凹石、面繩前庭式土器などである。

#### (1) 曾畠・轟系土器

曾畠・轟系土器と確認できる資料は、口縁部片・胴部片合わせて13片であるが、みな小破片である。有文は3片にみられ、そのうち1片が口縁部片である(第3図及び図版第6-1参照)。

出土地点は海岸よりの護岸に近いところである(第1図B地点参照)。出土層準はビーチ・ロック中の海拔110～70cmの層準で(第2図参照)、ブレーカーによるビーチ・ロックの破壊作業中、きわめて散発的に検出された。

土器は非常にもろく、しかも小破片のため、固結したビーチ・ロックから検出するのは容易でなかった。

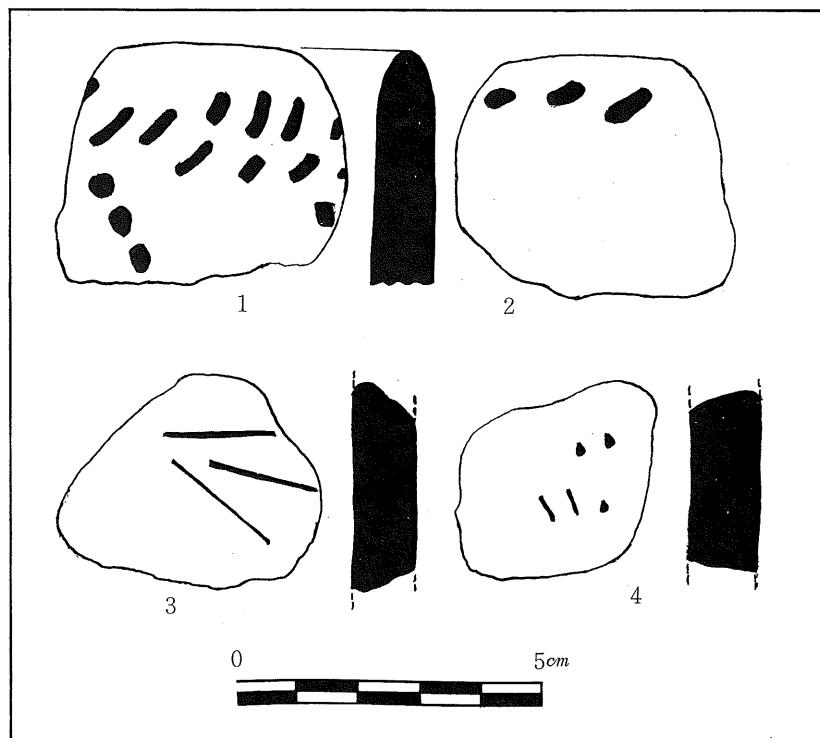
色調は、器面が褐色・ゆう褐色を帶び、内器面がゆう褐色、帶黃褐色を帶びるものが多い。胎土には、主として長石類が含まれ、黒雲母・石英・それに輝石?もわずかに混入している。他には、雲母質砂岩の異質岩片が部分的に濃集するものもみられた。

器厚は10mm内外で、最大は12mmである。

第3図の1(図版第6-1)は、口唇の断面がや、丸味を帶びて直口する器形で、色調は外器面がゆう褐色、内器面が黄色味を帶びたゆう褐色を呈している。文様の要素は、工具を器面に深く刺し込んで施した刺突文と連点文からなる。刺突文は、横位に無軸の羽状文をおもわせるものであるが、小破片のため展開は明らかではない。連点文は、斜めに縦走しているようである。器面の内側(同図の2)にも、単列の米粒大の刺突文様がみられる。

第3図の3は、外器面の色調が橙色を帶びた褐色、内器面が帶黃褐色をなしている。文様は、沈線文である。

第3図の4は、外器面の色調が褐色を帯びた小破片で、内器面はゆう褐色を呈している。文様の施された外器面がいちじるしく損耗しているが、刺突文らしきものがみられる。



第3図 喜屋武同村貝塚出土 曾畠・轟系土器

## (2) 凹 石

図版第6-2は曾畠・轟系土器の検出された地点の海拔95cmのビーチ・ロックから出土した凹石である（図版第4の3参照）。

凹石の周縁にはビーチ・ロックが付着している。凹石は、や、橢円形をなし、長軸116mm・短軸75mm・肥厚50mm・重量 875g である。凹石の両先端には打痕、表裏及び両側面には凹がみられる。石質はアルコース砂岩（花岡質砂岩）である。

## (3) 化石人骨及び獸骨片

護岸に近いビーチ・ロックの層準から、業者によって化石人骨（頭骨）が検出されている（第1図および図版第3-3参照）。標品は、県文化課収蔵庫に保管され、調査研究中である。

写真は後頭部であるが、眼孔及び顎の部分がビーチ・ロックの中に陥入している。いずれ、専門家によって整理され、報告されること、おもわれるが、その出土地点が曾畠・轟系土器の検出された地点（第1図B）より約1m離れた南側の地点（第1図A）であり、出土層準もほぼ同位であるので、曾畠・轟系文化人ではなかろうかと推定される。又、化石人骨の出土した層準（海拔 110~60cm）からは、人間の指の骨や獸骨も化石状態で検出されており、木炭も多量に採取された。木炭のC<sup>14</sup>測定と化石人骨の調査結果に期待したい。

#### (4) 面繩前庭式土器

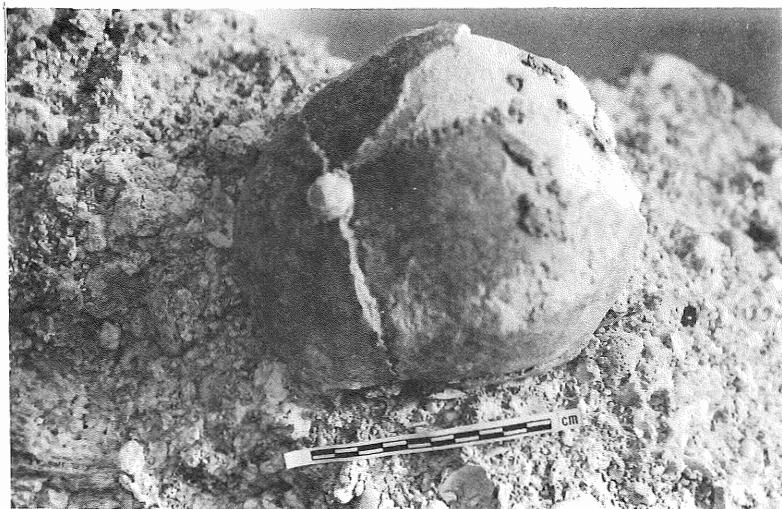
註<sup>7</sup> 面繩前庭式土器が、曾畠・轟系土器の出土した地点より70m離れた北東側の土手断面から検出されている。こゝは貯水施設の壁面をつくるために削られた所で、標高は約7-8mである（第1図E地点、図版第5-1）。

出土した層位は赤土のマーチ層で、図版第6の3は安里嗣淳氏によって、同図版4の1-5は島袋良徳氏・大城逸朗氏・筆者等によって検出されたものである。

器形は口縁部が外反し・胴部で張り出す壺形土器で、器壁は6mm内外で一定する器面調整のよくなされた土器である。

図版第1 ビーチ・ロックから検出された人骨

（海拔85cmのレベル）



図版第6-3のように、細い凸帯が口唇部と胴部に移行するあたりにみられ、その間を縦走する凸帯が貼りつけられている。その凸帯上には箆による刻み目がみられる。二条の凸帯間に鋸歯文を数条重ねたような沈線文がみられ、凸帯下にも縦走する沈線文がみられる。胎土には、微粒の長石・石英・雲母が含まれ、焼成は良好で黒褐色を帶びている。

図版第6-4でNo.6は面繩前庭式土器が検出された断面から採集された石片で、一方が研磨されていて刃部をおもわせるものである。石質は結晶片岩である。

#### (5) 後期無文土器

ビーチ・ロックをおおっている褐色砂層又は褐色混土砂層からは、後期無文土器が採集されたが（第1図C～D地点参照）、現在はことごとく破壊されてしまった。

図版第6-6は、第1図D地点から採集された夜光貝の蓋で製作された貝斧と称されているものである。註<sup>8</sup> その用途は、国分直一氏によれば穂積み具ではなかろうかとされているが、筆者は、魚を調理する際の利器にも使用されたろうと考えている。

図版第6-5の資料は、喜屋武同村貝塚から道を距てた南側の畑地（図版第5-2参照）で、試掘によって検出された後期無文土器である。1m四方の試掘pitを入れたが、層序は東壁面で一応3層まで確認された。第1層は表土の褐色混土砂層で攪乱されており、遺物は貝殻片と土器片が少量検出された。第2層は20cm内外からなる褐色砂層で遺物包含層である。第3層が白色砂層で無遺物層であった。この層は厚く、時間の都合で下の層まで確認することはできなかったが、完掘すればビーチ・ロックの層に

到達するのではなかろうかと推定された。いずれ、本格的な調査がのぞまれる。

遺物包含層から検出された土器（図版第6-5の1~4）は、従来の後期土器と位置づけられているもので、器形が直口ないしはやや外反する甕形土器である。器壁は8mm内外で、胎土には雲母が混入している。色調は、褐色又は黄褐色をなして焼成良好である。

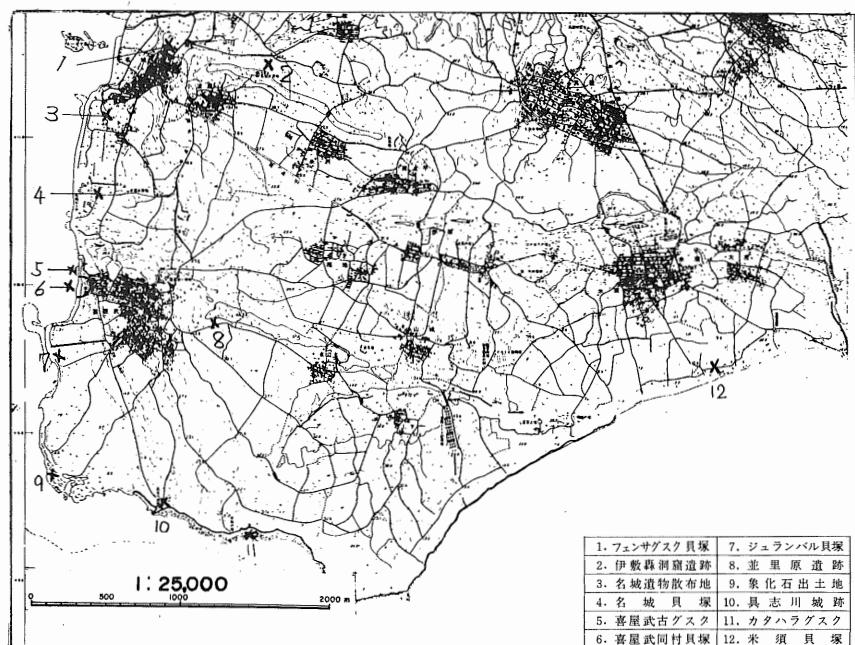
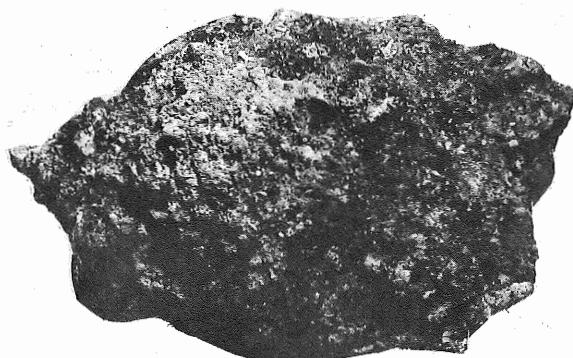
#### 4. む す び

以上、喜屋武同村貝塚の遺跡破壊に伴なう資料検出について述べてきたが、本遺跡においては、層位と遺物の対応が把握されたことは意義深いものがある。即ち、ビーチ・ロックの層には曾畠・轟系土器が、背後の土手断面のマード層（赤褐色土層）には面繩前庭式土器が、更にビーチ・ロックの上をおおっている褐色混土砂層には後期無文土器が包蔵されていた。しかも、遺跡は約4000m<sup>2</sup>にわたる広大なもので、その性格といへばこれまで類例のない貴重な複合遺跡であることがわかった。

また、曾畠・轟系土器の出土した層準（海拔110~60cm）からは、化石人骨や生活層と考えられる灰・木炭・焼け砂（厳密にいえば焼けたビーチ・ロック）などが検出された。

化石人骨は、専門家により調査がすゝめられており、その結果を待たなければ積極的な発言は差し控えたいが、層位的には、曾畠・轟系土器の出土した層準であり、曾畠・轟系文化人の蓋然性が強い。木

図版第2 ビーチ・ロック中にみられる灰、木炭、焼けあとのある生活層



第4図 喜屋武同村貝塚付近遺跡分布図

炭の測定結果を得て、改めて報告されること、おもう。

喜屋武同村貝塚の周辺には、道路を距てた南側の畠地に後期貝塚が確認され（図版第5-2）、北側の漁港に近い海浜にとび出た海崖にはグスク「喜屋武古<sup>フル</sup>グスク」（図版第5の3）が確認されるなど、泉を中心として約5000～6000年前から現代にいたるまで生活の舞台が展開されている。第4図はその周辺の遺跡分布図であるが、喜屋武岬海岸からは象化石が発見され、その近くには国指定の具志川城跡がある。特に民俗上、注目したいことはジュランバル貝塚（第1図-7参照）のある砂丘に「イシャラグワー」と呼ばれている所があるが、そこにはモーヤ（野屋）<sup>註9</sup>のある幼児墓地がみられる。

以上概観したように、この地域は学術的・民俗的にもきわめて重要な地域であり、今後の総合調査がのぞまれる。

最後に喜屋武同村貝塚が市当局によって破壊され、記録保存すらできない状態で消滅したことは全く痛恨であり、今後かかることがないよう遺跡保存に前向きの姿勢で対処していただきたいことを強く要望して、むすびにしたい。<sup>註10</sup>

註1 1956年版 文化財要覧（琉球政府文化財保護委員会発行）喜屋武貝塚の項参照。

註2 当館の地質担当、大城逸朗学芸員の教示によるもの。

註3 高宮広衛、知念勇、上地正勝「沖縄県読谷村字渡具知東原発見の土器」（考古学ジャーナル11、1975 ニュー・サイエンス社）

註4 沖縄最古の曾畠式土器出土＝嘉手納の野国第二貝塚＝ 1975年10月18日・琉球新報の記事。

註5 宮城長信氏（県立小禄高校教諭）の採集品に轟系かとおもわれる貝殻文土器がある。

註6 繩文前期の土器発掘＝伊是名村具志川島＝ 1975年12月17日、沖縄タイムスの記事。

註7 河口貞徳 奄美における土器文化の編年について（鹿児島考古第9号 1974 鹿児島県考古学会）

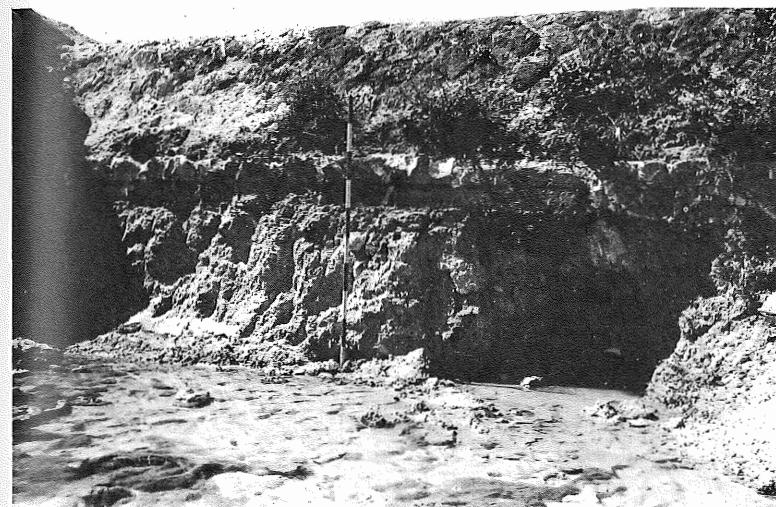
註8 金閥丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」（水産大学校研究報告人文科学篇 昭和39年9月発行）

註9 伊波普猷「南島古代の葬制」（伊波普猷全集第5巻）所収の大宜味村の子供の墓・円錐形のムーヤ（野屋）と類似している。

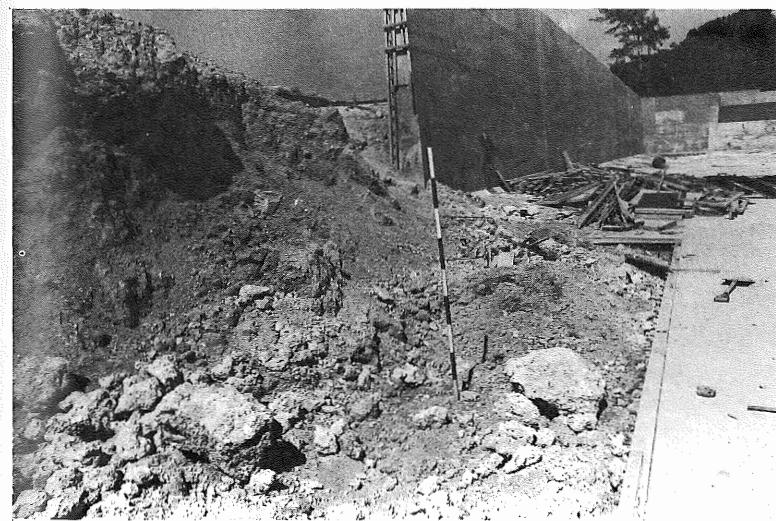
図版 第3



1.  
県文化課・糸満市当局による現地調査



2.  
護岸基礎のコンクリートの下に厚いビーチ・ロックの層がみられる。



3.  
化石人骨（頭骨）出土地点（海拔85cm）

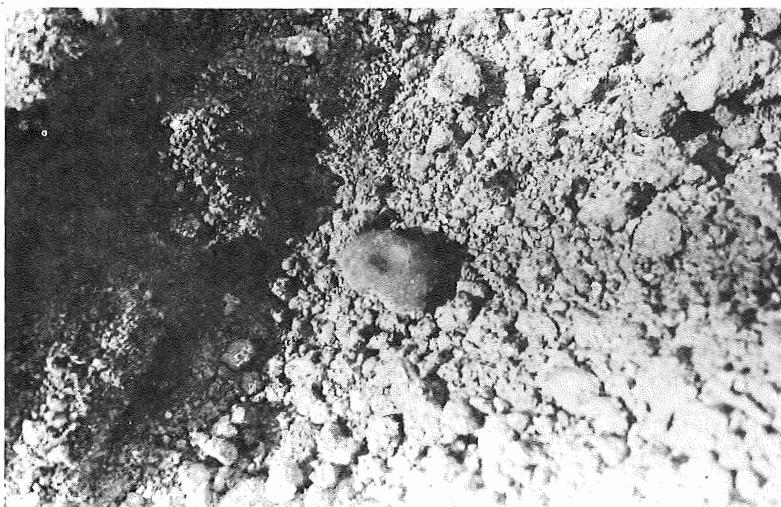
図版 第4



1.  
化石人骨の出土したビーチ・ロック

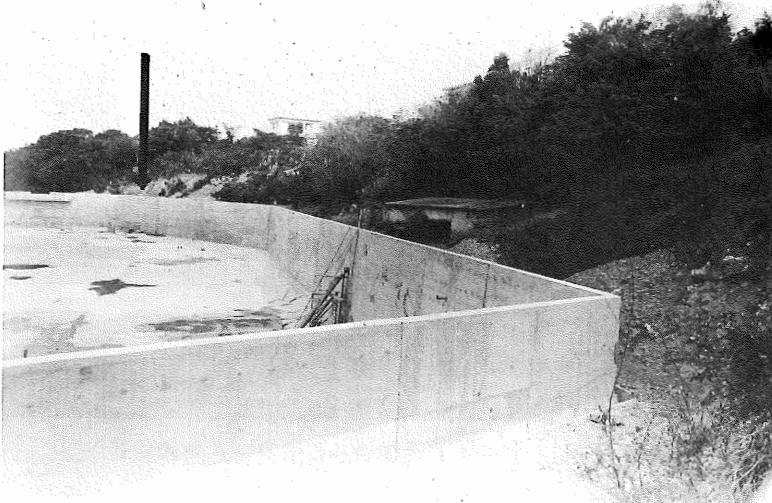


2.  
ビーチ・ロック層から出土した曾畠・轟系土器  
(海拔75cm)



3.  
ビーチ・ロック層から出土した凹石  
(海拔95cm)

## 図版 第5



1

破壊された跡に貯水施設工事がすゝめられている。矢印の土手断面から面縄前庭式土器が検出された。



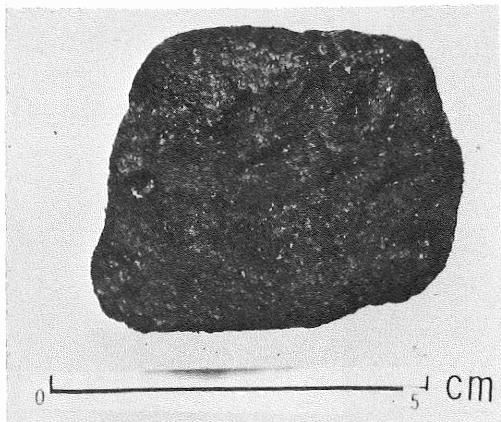
2

後期無文土器の出土する畠地。  
黒い線で囲っている部分が試掘地点。

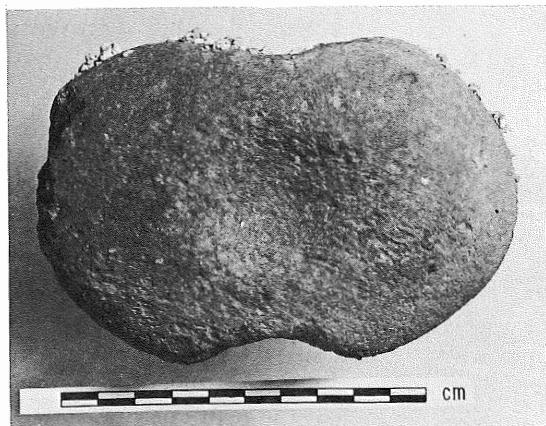


3

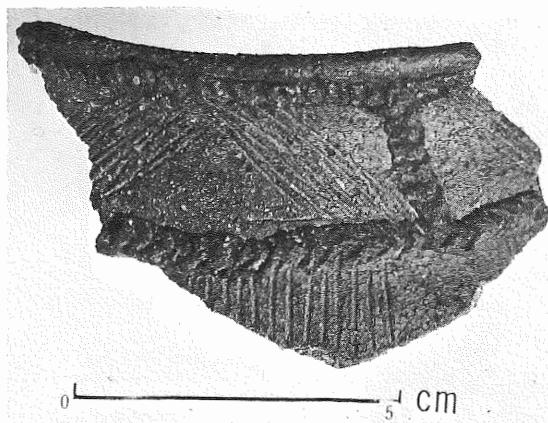
フル  
喜屋武古グスク



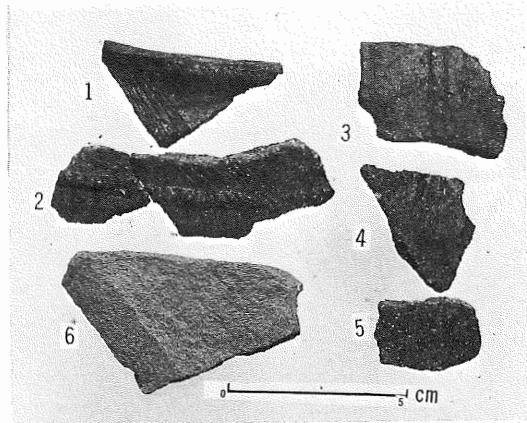
1. ビーチ・ロックから出土した曾畠・轟系土器（海拔75cm）



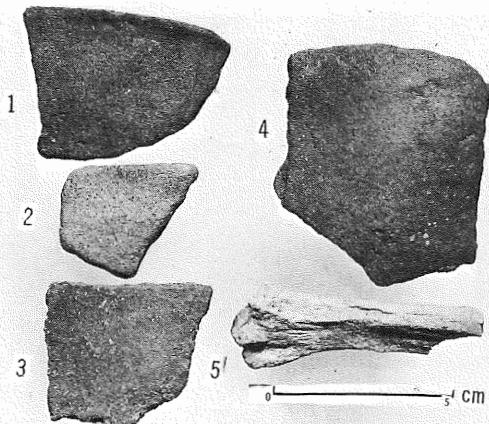
2. ビーチ・ロックから出土した凹石



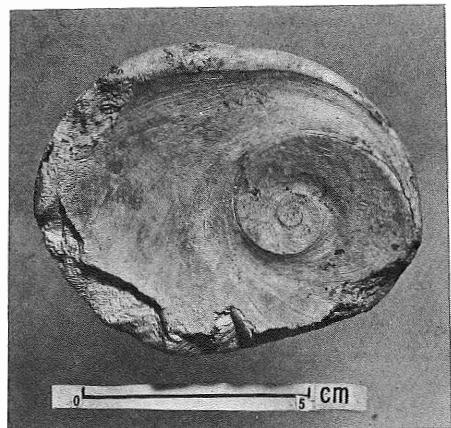
3. マーデ層から出土した面縄前庭式土器



4. マーデ層から出土した面縄前庭式土器  
及び石器片？



5. 喜屋武同村貝塚より南側畠地から出土  
した後期無文土器



6. 喜屋武同村貝塚D地点から出土した貝斧